

10月30日(日) 10:20-12:20

パネルディスカッション Panel Discussion

外国人は災害弱者か?!

Do Non-Japanese Become Vulnerable in a Disaster?!

座長・司会

木村玲欧 (兵庫県立大学)

パネリスト

羽賀友信 (長岡市国際交流センター)

花岡正義 (「やさしい日本語」有志の会)

杉本篤子 (「やさしい日本語」有志の会)



災害時の外国人における3点の問題

災害時の外国人(日本語を解する能力が高くない人々: 在住外国人・観光客など)における問題点をまとめると以下の3点になる。1点目は、支援者が「被災者」になる可能性があること、2点目は、平時において利用している資源(人的資源・サービス)の多くが利用できなくなること、3点目は、支援者にとって平時には存在しない多種多様な仕事が膨大に発生するため平時には行っていた支援までもできなくなることである。

この3点において外国人は災害弱者(災害時要援護者)である。災害時要援護者とは「必要な情報を迅速かつ的確に把握し、災害から自らを守るために安全な場所に避難するなどの、災害時の一連の行動をとるのに支援を要する人々」のことをいい、いわゆる一般的には「災害弱者」と言われる人々を指す。

しかし災害時要援護者という言葉は認識していても、その対象者として「高齢者、障がい者、外国人、乳幼児、妊婦等」というかたちで「外国人」が含まれていることを理解している人は少ないのが現状である。災害時要援護者対策となると、絶対数の多い高齢者、そして障がい者には目が向けられることはまだあるものの、外国人は絶対数の少なさやマスメディアの興味・関心の小ささによってなかなか光が当てられない。そして平時でさえ支援が限られる中、災害時には普段使える支援もほとんどないまま、多くの困難に立ち向かわなければならない。

災害現場における実態

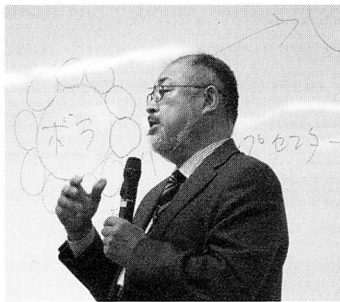
新潟県中越地方は自動車等の部品工場の集積地であり、中国、ブラジル、フィリピンをはじめ多くの外国人労働者が働いている。新潟県長岡市国際交流センター長の羽賀友信(はが・とものぶ)氏は、2004年新潟県中越地震、2007年新潟県中越沖地震において被災現場での対応者として活躍し、そこで培ったネットワークをもとに

2011年東日本大震災においても外国人支援の最前線に立っている。学会シンポジウムにおいても、羽賀氏の現場からの声と訴えに多くの聴衆は惹きつけられ心を奪われた。ここでは、羽賀氏の講演のすべてを紹介することはできないが、羽賀氏が取り上げた「災害現場における外国人問題の事例」を2つ紹介することで、読者に「気づき」を持ってもらいたい。

<以下、羽賀氏の講演をもとに要約>

人と人が出会うこと自体が交流業務であり、相手が何を考えて、どのようなリアクションを起こすかという文化の違いを理解しないと、適切な支援に結びつかない。地震発生時、日本人は防災教育を受けているために震度と被害の関連づけができる。また不安になった時には避難所に向かうことを思いつく。やってはいけないこと、やるべきことの見極めがある程度はつくのである。

新潟県中越地震時、長岡市の外国籍市民は2,200名であった。最初に驚いたのは中国人の反応である。中国人にボランティアをお願いしたとき、相談員が「羽賀さん、ほっとけばいいのよ」と言われた。「いつも相談を受けていて、何でこんなときにそんなこと言うのか」と言ったら、「中国は古代から、いざというとき自分以外信用するなということわざがあつて、政府は信用しません」と返事をされたのである。なるほどと思ったのだが、それが避難所においてある軋轢を生み出した。避難所に入った時に、日本人ならば、列を成して一つずつをみんなで分けるという概念で物資等の分配を行う。一方、中国人の多くは、一人で生き抜くために、まずおにぎりを独り占めし、次にそのおにぎりの上に毛布を独り占めしてお殿様のように座ったのである。一触即発状態となったときに、私が呼ばれた。私は「中国の皆さん、日本人はこういう考えで、こういう文化を持っています。ですから、みんなで均等にやるということを優先してください。日本の皆さん、中国の方



羽賀友信氏



花岡正義氏

はこういうことわざに従って自分が生き抜く道を模索しています。ですから、こういう行動をしています」。その後、中国人にボランティアを頼んだところしばらくして軌轢が瓦解した。これは災害時の外国人問題は単なる言語通訳だけで何とかなるものではないということの好例である。

もう一つの事例は、イスラム圏の人々への対応である。不安になったときには「お祈り」から始めるという宗教・文化である。それゆえ避難所におけるイスラム教徒への第一の支援は「メッカの方向」を教えることであり、避難所内にメッカの方向を指し示すマーク（イスラム教圏のホテルではしばしば矢印でその方向を指し示している）を掲示することである。2007年中越沖地震において、柏崎市の避難所で手伝いをしていた時に、イスラム教徒が避難所に来た瞬間に「駄目」と言って踵を返して帰ってしまった。避難所においてよく出てくる人気メニューである豚汁を見たのである。後日、防災訓練の際に、イスラムからの留学生に「どういう非常食を作ったらいいか」と聞いた時に、意外な答えが返ってきた。彼らは「豚汁がいい」と言ったのである。「肉を入れなきゃいいじゃないか」と。これも目から鱗であった。彼らは「野菜ベースのものは一緒に作って、お肉は別に調理しておいて、日本人は入れればいいし、僕らは入れなきゃいい」と言ったのである。つまり「豚肉抜き豚汁」である。これも交流からしか生まれない支援である。災害時にはこのように異文化問題が顕在化する傾向がある。私たちが日ごろの交流業務をとおして、その人たちが何か起きたときはこう反応する

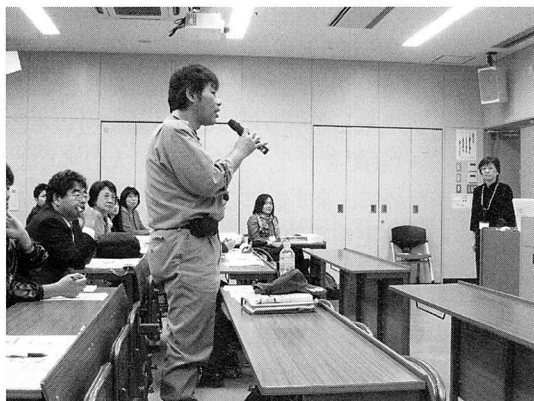
ということを知っていないと適切な支援ができない、ただ単に日本語の難しい災害用語を訳せばいいだけではないというのはこのような理由からである。

外国人にどう防災力をつけるか～

「やさしい日本語」有志の会の活動

シンポジウムでは、もう1件、京都を地盤に活動している「やさしい日本語」有志の会の花岡正義（はなおか・まさよし）氏、杉本篤子（すぎもと・あつこ）氏へ講演を依頼した。災害発生時、防災に関する基礎知識も少なく、言葉もわからない外国人は、災害による被災者になるだけでなく、情報弱者にもなる。自ら判断し、行動するためには何よりも正しい情報を迅速に得ることが大切だが、災害時の日本語は日常生活では見聞きしない、また教科書にも出てこない専門用語や言い回しがたくさん出てくるし、そもそも地震・災害の知識がなければ単語を訳されたところでイメージもできない。例えば「身の安全を確保する」「安否を確認する」「余震が発生する」といった簡単な言葉でさえ、翻訳しようとするとはたとえ考え込む人も多いのではないと思われる。

「やさしい日本語」有志の会は、各メンバーが異なった団体でボランティア日本語教室に関わっており、平時においては在住外国人に一番近い存在である。そこで、ボランティア日本語教室でも、ぜひ防災教育に取り組んでもらおうと立ち上げたのが本会である。本会では、現在、日本語を学ぶ外国人にとってわかりやすい「やさしい日本語」





杉本篤子氏

Moderator

Kimura, Reo (University of Hyogo)

Panelists

Haga, Tomonobu

(Nagaoka International Affairs Center)

Hanaoka, Masayoshi

(Easy-Japanese Supporters of Kyoto)

Sugimoto, Atsuko

(Easy-Japanese Supporters of Kyoto)

の趣旨と翻訳方法を学べるワークショップの開催や、日本語教室で使える、防災教育の教案や防災グッズカードゲームの作成、防災グッズの貸し出しや展示会、ホームページでの情報収集と共有などに取り組んでいる。なおこの試みについて、2011 年度の内閣府・防災教育チャレンジプラン優秀賞を受賞することとなった。具体的な成果については、ホームページで公開されている。前述の防災グッズカードもホームページからダウンロードすることができる。興味のある読者は、インターネットで「やさしい日本語有志の会」などと入力してアクセスしていただきたい。

<http://nihon5bousai.web.fc2.com/>

木村玲欧 Reo KIMURA

兵庫県立大学

